

食・農・環境を結んで 百姓たちの新しい風

食べ物や農業がなおざりにされているいま、畦道から発信しよう
—というフォーラムが七月二十九日、上川管内当麻町で開かれた。
有機農産物の輪を拡げ、環境を保全する農業の構築に向けて熱い議論
が交わされ、農業の空中散布に疑問が噴出した様子をレポートする。

ルポライター

滝川 康治

農業は安全な食への源

九三年の大冷害をきっかけに起きた「平成米騒動」は、農業問題をめぐる議論を活発化させた。旭川周辺で特別栽培米を手がける農家が増えて昨年、東川町で開いた「米問題フォーラム」もその一つで、特栽培を通じた生産者と消費者の結びつきを深めた。第二弾の今年には、食の問題を軸に議論を深めることになった。

どこ拡げる有機農業の輪

別項の基調講演を行なったのは、熊本県の公立菊地養生園診療所長・竹熊宜孝さん。「医は食に、食は農に、農は自然に学べ」をモットーに、養生説法で予防医学の重要性を訴える竹熊さんは、診療所周辺に農場をつくって無農薬農業も実践する人。ユーモアと風刺の効いた講演に、会場は何回も笑いに包まれた。

人が健康であるためには、まず食べ物
物が安全でなければならない。だから

パネルディスカッションの大きな柱
は、「有機農業の輪をどう拡げるか」。本



食・農・環境がテーマになったパネルディスカッション

誌の取材がきっかけで知り合った地元
の農民から、わたしはコーディネータ
ー役を頼まれていた。
「脱サラ農民」の一人、当麻町内で野
菜の有機栽培と宅配に取り組む福山憲
昭さんは、東京にいたころ農産物の共
同購入をしていた。そんな経験から、

●基調講演

命が一番、金は二のつぎ

熊本県公立菊地養生園所長 竹熊 宜孝氏



うちの病院を訪れた栄養士さんに、日
本の牛が外国産のエサで飼われているこ
とやポストハーベスト農薬の話をするこ
とも知らなかった。外国人なら大学生で
も知っている。このままだと日本の将来
は、命よりも金の方に引っぱられていく
んじゃないか。私たちは、命の源の「食
べ物」を口にしなければ生きられないの
に、それがいつの間にか「食品」になっ
てしまった。米の消費拡大や自由化反対
を言いつつ、農協が無果汁の飲み物を売
っていてどうなりますか！

かしき。日本人一人当たり年間七十五キ
ロあった米の消費量が今では五十キロ。
米余りの政策がどンドン進んできた。す
き焼き、酢の物、寿司と、その差二十
五キロの分だけ砂糖を食べている。
「品物の山」と書いて癌(ガン)、活性酸
素が多い人にはガンの花が咲く。βカロ
チンの多いニンジンやカボチャ、ビタミン
Cが多いイモ、豆や米の胚芽にたくさ
ん入っているビタミンE—命のもとと農
産物を食べることでガンを防げる。
アグリカルチャーの言葉のように文化
を創るのが農業はずなのに、「農がつぶ
れて国亡ぶ」た。長野の講演会場に、「土
地も家も先生に差しあげます。有機農業
をする人に渡してください」との紙手を

携えて、千葉の老夫婦がやってきた。「命
を絶やさなさいでくれ！」という叫びだと
思い、ジーンときました。そんな思いの七十
〜八十代の人がたくさんいる。土いじり
は命をつくること、ぜひとも「土からの
教育」をしてほしい。
たった一つしかない命と地球をみんな
で考えないと、早晚、真っ白な地球にな
ってしまう。一人の人間を二十代さかの
ぼると百万人の命がながっている。そ
の先頭に立つ若い人の食べ物の三分の二
は外材。せめて、赤ちゃんとお母さん、
子どもたちには国産材と無農薬の有機米
を食べさせてほしい。町長さんたちには
そうした行政指導をしてほしいし、先生
方には「命の教育」をやってもらいたい。

「食品添加物、農薬、化学肥料と、こ
の二、三十年の日本は壮大な人体実験
をやった結果、食文化が崩壊して農産
物が商品化してきた。百姓が食の番人
の立場を放棄してきた面も見逃せない。
マスコミ情報の偏りで、大都会からは
農村の現場が見えていない。宅配の若
いお客さんのなかには、生産者とのか
わりを避ける傾向もある」
と指摘する一方で、農民側から情報
を発信して消費者を啓発していくこと
の大切さを説いた。
米とシイタケをつくる伊藤雄一さん
は、この道二十六年のベテラン。農民
運動歴も長い。副会長を務める「当麻
グリーンライフ研究会」には二百戸が
加入しており、今年には四百三十ヘクタ
ールの水田にとつき米(特栽培米の
愛称)を作付けている。
「八年前、消費者協会と提携して十五
俵届けたのが特栽培の始まり。今は地
域こそ取り組むようにしている。
(新食糧法の施行で) 来年から特栽培
はなくなるが、特色をつけて消費者に
理解してもらおう、という気持ちでい
きたい」と、健全な食べ物生産に意欲
をのぞかせた。

北海道はここ数年、「グリーン農業」と銘打って農業・化学肥料使用量の三割減を目標に試験研究を積み重ねている。有機農業とは異なるものの、環境保全型農業へ向けた積極的なアプローチといえる。道立中央農業試験場経営部の主任研究員・山本毅さんは、「グリーン農業研究班」の事務局長だ。

「今後の本道農業の戦略は、差別化とコスト低減」の二つの選択肢しかない。良質・安全が前者に、安価・安定供給が後者になる。消費者は頭では「安全」と思いつつ、実際にはきれいな野菜を持つていく。生産者自体も農産物にメッセージをつけて販売していくことが必要でしょう」と提言した。

これに対して、食品添加物の規制やゴルフ場問題に取り組んできた、日本消費者連盟運営委員の神原昭子さんが、次のような疑問を投げかけた。

「グリーン農業は素晴らしい決断だけど、その一方で、道は農地や森林をつぶしてゴルフ場を造ることに手を貸している。農水省は北海道をモデルに大規模農業を進めようとしているが、それが一番の間違いで、有機農業とは両立しない。虫や微生物を殺す農薬や化

学肥料に頼る道をこれからも続けるのかどうか——もつと農業のシステムの問題に入らないとまずい」

コープさつぼろの農産部長・田鎖忠利さんは、農産物のバイヤー歴が長い。「北海道はそもそも減農薬という意識もあり、有機農産物の取り扱いには停滞している」状況の一方で、外国産の有機農産物攻勢に直面している。

「無農薬や有機をPRして、ニュージーランドのキウイフルーツや、オーストラリアのプロットベリーやサイインゲン、ニンジンの売り込みが強まっている。こうした動きに対する取り組みも考える時期だと思う」（田鎖さん）

食を取り巻く状況がここまできていることを実感させる報告だった。



無農薬栽培を手がける農場を見学する参加者たち（7月30日）

と批判が相次ぎ、拍手が起きる。竹熊さんがこう締めくくった。

「二十年前に『農業は農毒薬の略字なり。虫はコロット、人はジワットと殺される』と書いた。生協が真剣に命の運動をやれば世の中変わるが、きれいな事ではかえって農家の足を引っ張る。農産物が東京の生協に高く売れても、地元の子どもに毒を食わせたり、空散を浴びさせるといふ理屈は通らない。子どもたちがいかに生きるか——地域のトップが本気で考えて、水や山を守る運動をやらないと地球は駄目になる」

農・食・環境が自然につながったフォーラムだった。

道内で最も恵まれた「上川百万石」の穀倉地帯で、農業の再生を議論する場は来年、旭川でもたれるという。輸入自由化や農業いじめの嵐に、「平成の百姓一揆」の新しい風が吹きはじめて



「とっととき米」ののぼりが立つ一方で、農薬の空中散布も…

状のコストの大半は人件費。それも建設業の時給二千円に対して農業は八百円で、これを削ることは無理。生協のスローガン『良いものを安く』は、七〇年代の工業製品に対する発想だ」

こう福山さんが反論し、「農薬や食品添加物を減らし、宣伝や規格の簡素化などでコスト低減は可能」という山本、田鎖さんとの間で議論になった。

命を永續させる農産物を

絵本の里づくりを進める剣淵町の有機農産物グループ・生命を育てる大地の会の池田伊三男さんは、「中間（の経費）を省かなければ、良いものを安く作ることはできない。子や孫に迷惑をかける有機農業は、支えてくれる人がいないと育たない。流通の人も命を永續させる農業を真剣に考えてほしい」

と、体験談を交えつつ、フロアーから注文をつけた。

旭川市内で特裁米や農産加工を手がける谷口威裕さんは、「農家は時には消費者になり、『良いものを安く』の思想に陥る自己矛盾を抱えている。それに気づいて接点を求める努力が大切だ。農産物を考えるとき、環境の視点をもつと持つべきだと思う」と発言。これを受けて、神原さんが地域で取れるものを食する「身土不二」の考え方を強調して、参加者の共感を呼んだ。

「食べ物にも環境監査の考え方を当てはめることが大切。高く売れるという理由で主食をつくる土地に日本向けの野菜を栽培し、多くのエネルギーを使って運ぶのは、土地の人の権利を奪うこと。そうした視点を入れなければ、外国産の農産物に対抗できない。もう少し謙虚になって、命を育む食べ物を考えてほしい」（神原さん）

農薬の空散に疑問の声

ディスカッションの最後は、参加者の発言をきっかけに、農薬の空中散布（航空防除）をめぐる議論で大いに盛り上がった。町内では数年前から空散

が始まり、今年はフォーラムの翌日、全体の八割の水田で実施される予定とか。来賓席にマイクを向けてみた。

「生産性を上げるために、やむを得ざる処置と考えている。食べ物にはいい影響は与えていないと思うが、手で草取りをすると、大変な労力がかかる。

（空散の話）明快に話せないのが残念だ」（物井清人・JA当麻組（白長）

「太いホースを引っ張る昔の防除は命とかかわるくらい大変な仕事で、農家は（空散で）楽になった。わたしは空散協議会の会長でもあり、難しい問題だ。理解してもらいながら続けるべきと思うが、困惑している」（小坂橋頭一・当麻町長）

「命と農業」の講演を聴いたあとだけに歯切れが悪い。地元農民からは、「片方はとっととき米、もう一方で空散の白旗では、農家は救われない。農薬というより毒ガスのイメージがある」（伊藤さん）

「規格外になる米も精米段階でちゃんと除かれる現実を論じないで、効率の物差しで空散が行なわれている。別の防除体系の研究に目を向けていくのが行政の課題だ」（瀬川守実行委員長）